

大塚敬節
責任編集
矢数道明

世近
漢方醫學書集成

98 淺田宗伯 四

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 98 浅田宗伯(四)

第Ⅲ期
全40巻

昭和五十七年十二月二十五日 発行

編者 大塚敬節

発行者 矢数道明

発行所 中村安孝

株式会社
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)一五二七〇番代
振替口座 東京七一〇四九四番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所

予約限定版



落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫

凡 例

- 一、本書第九十八卷「浅田宗伯(四)」には、『雑病論識』を収録した。
- 一、本書は全て影印版によつて収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本は原寸で、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、底本にある蔵書印及び書き込みはそのままにした。
- 一、底本は次の通りである。
 - 雑病論識 写本 六卷六冊(大塚恭男所蔵)
- 一、本書収録書目の解題については、第九十五卷「浅田宗伯(一)」に記した。

浅田宗伯
(四)

目次

凡例	三
雜病論識	
雜病論識總評	五
卷之一	二
弁瘰濕渴病脈証	一四
弁百合狐惑陰陽毒病証治	六
卷之二	二七
弁瘰病脈証并治	二九
弁中風歷節病脈証并治	一四
弁血痺虛勞病脈証并治	一八一
弁肺痿肺癰咳嗽上氣病脈証并治	三三
卷之三	二六五
弁奔豚氣病脈証并治	二六七
胸痛痺心痛短氣病脈証并治	二七
腹滿寒疝宿食病脈証并治	二九
卷之四	三五

并痰飲欬嗽病脈証并治	三五
并消渴小便不利淋病脈証并治	四〇九
并水氣病脈証并治	四三六
卷之五	四八一
并黃疸病脈証并治	四八三
并驚悸吐衄下血胃滿瘀血病脈証并治	五三
并嘔吐噦下利病脈証并治	五四〇
并瘡瘍腸癰浸淫病脈証并治	五九
并跌蹶手指臂腫軀筋陰狐疝蛇虫病脈証并治	六〇六
卷之六	六三
并婦人妊娠病脈証并治	六三五
并婦人產後病脈証并治	六四八
并婦人雜病脈証并治	六七一

雜
病
論
識

雜病論識

風

修琴堂藏書

第金匱5號



雜病論識總評

雜病經絡先後病一篇、其所論繫衍叢脞、前後支離、
意率戾、更不似傷寒論簡嚴典實之體、蓋後人當
編集之時、薈粹匡衍之大法、不可專指一病者數十
端、揭之於卷首、以為總論、猶傷寒論之有傷寒例也、
何者、設問答以論難之者、乃素難之義、而固非本論
之體裁、先哲既於傷寒論辨駁之、其微一也、傷寒論
未嘗說臟腑經絡、此篇主說之、殆与素問經絡篇一
轍、非古義、其微二也、傷寒論未嘗以陰陽五行說之、
況於運氣乎、運氣之說、六朝以前所未經見、自王冰

以天元紀大論等七篇、及六節藏象論七百十八字、
虞入素問、而後匡家始張皇之、此篇所論運氣諸說、
亦皆迂濶穿鑿、無足取者、其為後人之偽託明矣、其
微三也、傷寒論未嘗以三部之脈配諸陰陽、今皆配
之、其微四也、又論病傳治療之先後、以下利清穀身
體疼痛是傷寒論太陽中篇四逆湯條所詳悉、假令
仲景氏毫亦豈如此喃喃、鄭重乎、其微五也、五微既
備、又何所眩曜、信其奸偽乎、特怪諸注家未覺之、或
謂為匡家之大經大法存焉、曰護欄停為之說、可歎
之甚矣

霍亂篇脉經載在百合孤感後中凡歷節前外臺亦引為出傷寒論第十七卷則知為雜病錯簡也蓋後人曰厥陰篇有吐利霍亂亦有吐利乃據之於雜病中以附于厥陰後其意与痘濕喝俱有表証故揭在太陽前殆同祇足以見其手痕矣沉明宗金匱編注收之可謂復舊觀今從沉氏並脉經外臺訂正

五臟凡寒積聚病一篇文理陋劣不大似仲師簡古之體且其所謂中凡中寒与傷寒論之中凡中寒不同亦與半身不遂之中凡自異如素問所說五臟凡稍似近而其証一不契合何其說茫乎無定準夫凡

寒之為病、傷寒論中已詳且盡、烏何復課論五臟之中、凡中寒之為、余所為後人之附會者、蓋為之改也、徐氏諸輩不解此意、於脾胃二臟補出其遺、又於肝著脾約腎著三方、特論其趣要、可謂無用之辭矣、若夫積聚之病、徒論其脈、而不及其方、且題名已曰五臟凡寒積聚、而本條曰聚者、所病也、前後矛盾、足以見後人杜撰、

雜療方及禽獸魚蟲禁忌、藥菜穀禁忌三篇、有方無論、更不似前諸篇之體、且雜療方篇所云、石療自謚、溺喝之法、並出自張仲景為之、其意味絕、殆非常情

所及、本草所能開、實救人之大術矣。之語、外臺秘要引肘後、不引仲景、則此編疑似葛洪等之所撰。若夫禁忌兩門、金鑑云、原列在卷末、其文似後人補入。註家或註或刪、但傳世已久、難以削去、可謂卓識矣。凡此三篇、狗尾續貂、今皆屬刪却之例、

痙濕喝至婦人雜病、凡二十篇、文字簡奧精微、其義與傷寒論互發明、即所謂雜病論、在古与傷寒論相合、為十六卷、林億序所謂上則辨傷寒、中則辨雜病、下則載其方、并療婦人者是也。蓋傷寒論如左傳、雜病論如國語、雅不能少、無軒輊、俱無害於仲景。為之